3 月 19 日のメッセージ

聖書：ルカによる福音書　9：　28 – 36

「栄光に輝く」

イエスが高い山に登られ、祈っておられると、イエスの顔の様子が変わり、服が白く輝いたといいます(「イエスは、ペトロ、ヨハネ、およびヤコブを連れて、祈るために山に登られた。祈っておられるうちに、イエスの顔の様子が変わり、服は真っ白に輝いた。」ルカによる福音書 9:28-29)。そして、モーセとエリヤと語り合った、と(「見ると、二人の人がイエスと語り合っていた。モーセとエリヤである。」ルカによる福音書 9:30)。

このモーセもまた、山の上で様子が変わったと伝えられています(「モーセが……、その手には二枚の掟の板があった。モーセは、……自分の顔の肌が光を放っているのを知らなかった。」出エジプト記 34:29)。この時、モーセは十戒の書かれた石板を持っていましたが、実はこれは二枚目。最初の石板はモーセが砕いてしまったからです(「モーセは激しく怒って、手に持っていた板を投げつけ、山のふもとで砕いた。」出エジプト記 32:19)。

それは、モーセが山の上にいる間に、人々の心が神から離れてしまったからでした(「あなたがエジプトの国から導き上った民は堕落し、早くもわたしが命じた道からそれて、若い雄牛の鋳像を造り、それにひれ伏し、……」出エジプト記 32:7-8)。せっかく神自らがエジプトから導き出し、約束の地へと連れて行ってくださるというのに、人はすぐ「自分さえ良ければ」「今、この瞬間さえ良ければ」という誘惑に負けてしまいます。神がすぐ近くにおられ、直接向き合ってくださっているにもかかわらず、人はすぐに神の言葉から離れてしまうのです。

そして、それは、イエスの変容を見たペトロでさえも変わりはしません。大きな衝撃を受けたペトロは、今、この瞬間の喜びを切り取って、「自分さえ良ければ」の次元にイエスをとどめようとします(「ペトロがイエスに言った。『先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。仮小屋を三つ建てましょう。……」ルカによる福音書 9:33)。栄光に輝くイエスを目の当たりにしながら、「変容している」イエスを目にしながら、自分自身は変わることができないでいます。自分もまた、神の栄光を映し出す器であるはずなのに、それに気づかないでいます。

だから、神は弟子たちに直接語られるのです。

「『これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け』と言う声が……聞こえた。」(ルカによる福音書 9:35)

もう一度、きちんと神の言葉に、イエスの言葉に聞く姿勢を取り戻せ、と呼びかけられるのです。

神の声には力があります(「主の御声は杉の木を砕き／主はレバノンの杉の木を砕き」詩編 28:5)。その力を信じて神の方に向き直り、「自分」という覆いを外すことができます(「主の方に向き直れば、覆いは取り去られます。」コリントの信徒への手紙二 3:16)。自分の力だけでは帰ることのできなかった過去から離れ、未来を見据えて一歩を踏み出すことができます。自分の十字架を背負って歩き出すことができます。

その時、私たちは栄光に輝くイエスを正面から見ることができるようになっているのです。ペトロやヤコブやヨハネが、恐れることなくイエスに従い続けたように、私たちもイエスに従うことができるようになっているのです。

そして、私たちは自分自身でも気づかないうちに、自分の顔も主の栄光を映し出していることに気づかされます(「わたしたちは皆、顔の覆いを除かれて、鏡のように主の栄光を映し出しながら、栄光から栄光へと、主と同じ姿に造りかえられていきます。」コリントの信徒への手紙二 3:18)。その光は私からまた隣人へ、そのまた隣人へと届いていきます。主の平和を実現するために。

確かに変わることは不安を伴います。できることなら「今のまま」で一生を終えたい。しかし、恐れることはありません。山上での変容を経てイエスは、ますますご自身の十字架への道を邁進されます。神に託された役割を果たし続けられます。ただ神を見上げ、神の思いに応える人間へと、イエスも作り変えられ続けておられるのです。

私たちもそのイエスに従いたい。神に用いられる器として、恐れずに、私たちもまた作り変えられ続けたいのです。